

合同 No. 464

「エリサベトとマリアのある日」

世田谷中原教会牧師
金 明瑾

「六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなづけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった」（ルカによる福音書1：26～27）。

「六か月目に」。これは、エリサベトが身ごもって六か月目になったことを意味することばです。一般的に妊娠5～6カ月になると安定期と言われています。しかし、この言葉が出産への安定を表すだけの意味で書かれているとは思いません。赤ちゃんが安定期になるのを待っていた、特別な日を示唆していると思います。

クリスマスの登場人物の中では有名とは言えないエリサベトのことは、さらっと読むところかも知れません。しかし聖書では、この一人の女性の妊娠「六か月目」のことからイエスの誕生の予告をスタートさせています。エリサベトは、マリアと親戚関係で既婚者です。赤ちゃんが与えられることを長年祈ってはいたのですが、彼女自身は年をとっていたので、生物学的には無理という判断をしてあきらめていたのです。けれども神の恵みにより、「ヨハネ」という男の子が与えられます。「神にできないことは何一つない」（ルカによる福音書1章37節）。エリサベトは、このマリアの告白を、神の全能なる力を、マリアより一足先に経験した女性です。

エリサベトが身ごもって「六か月目に」なるその日に、何があったのでしょうか。この日、マリアに天使が訪ねて来ました。「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」（ルカによる福音書1章31節）。この内容は、マリア一人の信仰で受け止められる事柄ではありませんでした。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」。

このときのマリアは、天使の言葉に何を考えてい

たのでしょうか。多方面からの推測はできますね。

マリアは、短時間でいくつかの不可能を論理的に考えていたのかも知れません。驚くべき体験で身体は震えていたのかも知れません。けれども人間が大きな決断をするときは、論理的というよりは、胸いっぱいになって、それを信じる力によるのではないのでしょうか。「お言葉通りこの身になりますように」と、マリアは信仰告白をしました。

神は、マリアの信仰告白を導き出すために、エリサベトのことを「六か月」も前から、そして「六か月目に」なるまで準備しておられました。「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている」（ルカによる福音書1章36節）。

人間には不可能だと思うことが、神の力によって可能であるという証拠を備えて、神はマリアへ天使を遣わしたのです。“受胎告知”はある日偶然、または突然起こった出来事ではなく、神のカレンダーにすでに記されていた日でした。きっと、わたしたちの人生にも偶然、突然ではない日々が備えられていると信じます。

神の働きの方法を考えると、み業が行われる前に天使を送り、メッセージが告げられるまでは一緒です。また、二人の女性の場合は、神から男の子を受けられたのも一緒です。ですが、それを受け取る人の条件や環境は全く違います。エリサベトは年をとった既婚者で、マリアはまだ若くて未婚者です。一人は赤ちゃんが授かることを長年祈っていた人ですが、マリアはそんなことは思ってもいない、また願ってもいなかった人です。ですから、み業が行われるために神が用いられるとき、それは人の年齢や条件、置かれた環境によるのではないのです。

また、エリサベトとマリアからわかることは、神のみ業の中で恵まれる人となるのは、祈ったからそうなるのではなく、神に強いられたことの中にみ心を受け取ることができる、そのような人が恵まれる人となるのではないのでしょうか。